

Z会東大進学教室

難関国公立大・医学部英語／難関大英語 T

京大英語／難関大英語 T (京大)

一橋大英語／難関大英語 T (一橋大)



4章 総合問題4

問題

【1】

A.

全訳

我々の学校の卒業生を求めに来てくれ、そして、卒業生が仕事を求めて訪問する雇い主たちから、今日会社側が最も求めている唯一の種類^①の学生とは、考えるように鍛えられている、総合的な能力を持つ人物だと毎年聞いている。もしその学生が数字をうまく処理することができれば、それはとても結構なことだが、まず第一の条件は、事実からある状況を賢明に判断できることであるという。

B.

解答

- (1) 「全訳」の下線部^①を参照。
- (2) しかしそれ以後、科学の発達が速すぎて教育を受けた人であっても人知のすべてを——少なくともその大筋でさえも——理解することが不可能になってしまった
- (3) 「全訳」の下線部^②を参照。

解説

全体の構造を見てみよう。キーワードは同じ単語の繰り返しでもあり、他の同意表現で言い換えられていることも多い。この問題で初めから繰り返されているのは theory で、これが第一のキーワードである。何の理論かということ understand the universe するための理論である。

全体をいくつかの段落に分けて考えると、ℓ. 7 の In Newton's time … の前までが前段で、この部分には仮定法が多い。「こうなればよい」という希望である。後段ではそれに対する現実が述べられている。

前段（仮定＝理想）	後段（現実）
正しい宇宙理論の発見 →（一般人の）宇宙理解の進歩	急速な科学の進歩 →絶えざる理論の変化 →専門家でも理解困難

全体を要約してみると以下のようなになる。参考にしてほしい。

「正しい宇宙理論が発見されたら人類の宇宙理解の歴史に一時期を画するであろう。しかし、ニュートンの時代以来科学は急速に進歩し、新しい現象を説明するために理論が常に変化している。そのため専門家でもやっとその一部を理解できるだけで、一般人にはとてもついていけないようになった。」

全訳

①我々が実際に究極の宇宙理論を発見したらどんなことになるであろう。我々は正しい理論を本当に発見したと確信することは決してないであろうが、それは理論を証明することが

できないからである。しかしもしその理論が数学的に筋が通っていて、観察に適合する予言を常に出しているなら、それが正しい理論であると確信しても間違っていないであろう。それは宇宙を理解しようとする人類の知的苦闘の歴史の長く輝かしい1章を終結させるであろう。しかしそれはまた宇宙を支配する法則に対する常人の理解に革命を与えるであろう。ニュートンの時代には教育を受けた人が人知のすべてを、少なくともその大筋を、把握することが可能であった。しかしそれ以後、科学の発達の速度が速すぎてこれが不可能になってしまった。新しい観測結果を説明するために理論が常に変えられているので、理論は一般人が理解できるように程よくかみ砕いたり易しくしたりすることはまったくされていない。専門家にならなければそれは理解できないが、専門家になっても科学理論のほんの一部分しか正しく理解することはできない。㉔さらにまた、進歩の速度が非常に速いので、学校や大学で知ることは常に少し時代遅れである。急速に進む知識の最前線についていけるのはほんの少数の人々で、彼らも時間のすべてをそれに当てて、狭い領域を専門にしなければならない。それ以外の一般人は、どんな進歩がなされているのか、それらがどんなわくわくするのを作り出しているのか、ほとんどわからないのだ。

【2】

解答

- (1) b (2) 「全訳」の下線部㉔を参照。 (3) even (4) Neil
 (5) a
 (6) 犬の餌やディナーの準備、また客の相手など、たくさんのしなければならないことに
 圧倒されているから。(49字)
 (7) d (8) done

解説

- (1) 次の2点 (ℓ. 2以降) から下線部㉔の Mozart 「モーツァルト (の曲)」 というのは、
 比喩であることを読み取る。
 ① He closes his eyes and tries to muster the proper background music
 ② His rhapsody, however, is interrupted by the noises of his mother's trio ~ (この
 trio というのも比喩的表現)
 このように、ℓ. 2 以降には音楽にまつわる比喩がちりばめられている。その中にあっ
 て、Mozart 「モーツァルト (の曲)」 というのは「心地よい音楽の典型」として使わ
 れている。
 また、確かに plunge = jump ではあるが、plunge into the pool とはどこにも書いて
 いないのであるから、選択肢 d は論外である。
 (2) ○ twice as ~ as ... 「~の点で…の2倍」
 前半は現在完了で書かれているので divorced 「離婚している」という状態の「継続」
 を表している。
 (3) not so much as ~ (~さえない (= not even ~)) の not を without に換えただけ
 のこと。
 (4) 次の手順で考える。

①下線部④の直後に moved away とあるが、そうしたのが Neil であることは、本文第1段落の第2文 After two years' absence, Neil … upon returning home. より明らか。

②さらにそれを裏付けるのが、下線部④の直後の文 Her life … his absence. およびその後の文 He flinches ~ the egoism of sons. である。

③以上より、この段落における he / his / him が、ことごとく Neil を指すものだということは明らか。

※下線部④の直後の moved away をℓ. 17 の walks out (the gate) と関連づけて考え (he = gardener) とした人は、思慮不足。

(5) 空所㉔ (Neil の応答) の前にある、母親の質問、

Did you call the airport to make sure the plane's coming in on time?

の前半 (Did you) に呼応させるのであれば

I did. (= I called the airport.)

とするところであるが、選択肢の中にそれはないので、発想を変える。

そこで、後半 (the plane's coming in on time) に呼応させるものとして

It is. (= It [The plane] is coming in on time.)

すなわち、選択肢 a を選ぶ。

※ I につられて選択肢 c の I had. を選んだ人は、過去完了を再確認されたい。過去完了とは、あくまでも〈過去のある時点〉を基準にした表現であり、ここには〈過去のある時点〉を示す語句はない。

(6) 下線部⑥の直後に、「これからしなければならないこと」や「現状」が「列挙」されている点に鑑みて、端的に表現する。

(7) 下線部⑧の文は、その直前の文 (Neil の言葉)、

I hope things will be as comfortable as possible when Wayne gets here.

に対し (ムツとして) 出てきた言葉である、という点から考える。

選択肢 c は、from him が余分。

(8) 「様態の as」が使われているのであるから、次のパラレルな関係に着目する。

his body embarrasses him
as it has embarrassed him

本文では、前半より推測可能な embarrassed him の部分が省略されているわけだが、本問ではそれを「1語」で表せということであるから、代動詞の done を補う。

※単に embarrassed だけでは、他動詞 embarrass の目的語 him が欠落することになり、不可。

全訳

その日の午後遅く、ニールはプールの脇に長々と寝そべっている。2年いなかったのだから、帰郷の際に郷愁やら後悔やら喜びやらを感じるのも当然か、とニールは考える。彼は目を閉じ、映画のような帰郷の場面にふさわしいバックグラウンド・ミュージックを寄せ集めようとする。しかし彼の狂詩曲は、彼の母親率いる三重奏——ズカズカゴシゴシいうチェロやら、むせび泣くようなヴァイオリンやら、つかえてばかりのピアノやら——の騒音に

よって中断される。母親とリリアン・ハヴァラードとシャーロット・フェイダーが、モーツァルトの真只中に割り込んで来るのだ。

女たちはポーチに座り、おしゃべりをする。彼女らの声は、グラスの中の氷がカチャカチャいう音と溶け合う。ニールの母親を除いて、彼女らは皆、未亡人だの離婚女だのという女のささやかな集いの仲間である。リリアンの夫は22年前に彼女と別れ、毎月生活費として小切手を彼女に送っている。⑥シャーロットは、離婚期間が結婚期間の2倍にもなり、19の時に関わったテロリスト活動のため長期の刑に服している娘がいる。

ニールは目を閉じ、そういった言葉を単なる音として聞こうと努める。ほどなく、新たな雑音が近寄って来る。庭師とスペイン語で口論している彼の母親の声だ。彼は両手で頬杖をつき、2人を観察する。語気は荒く、熱を帯び、圧縮されて、爆発寸前に思われる。しかし口論はめでたく終わり、2人は握手する。庭師は小切手を受け取ると、ニールの方を見ることすらせずに門から出て行った。

彼は庭師の名前を知らない。母親が思い知らせてくれた通り、彼は家を出てから起こったことをほとんど知らない。彼女の生活は、息子の不在に影響されることなく続いているのだ。そう思うと彼は自らのエゴイズムに、息子というもののエゴイズムにたじろぐ。

「ニール！飛行機が時間通り向かってるか、確認の電話を空港にした？」

「したよ。」彼は彼女に大きな声で言う。「向かってるってさ。」

「いいわ。じゃあ、私はあなたたちが戻って来た時にはディナーの準備ができていようにしましょう。」

「ママ——」

「何？」その言葉は、尋ねているというよりむしろ答えているという感じの、ゲンナリして泣き叫ぶような声で出て来る。

「何か不都合でもあるの？」本来の質問を忘れて彼は言う。

「不都合なんかないわよ。」何もかも不都合よと言わんばかりの口調で彼女は言い放つ。「犬に餌をやらなきゃ。ディナーも作らなきゃ。それに、お客様はあるし。不都合なんかないわよ。」

「ウェインがここに来た時には、なるだけ心地よくなっていればいいね。」

「それってお願いなの、脅しなの？」

「ママ——」

サングラスの向こうで、彼女の目の表情は読み取れない。「疲れたわ。」彼女は言う。

「長い1日ね。私…私はウェインに会いたくてたまらないの。きっと彼は素敵よ。そして私たちは皆、素敵な、素敵な時を過ごすの。ごめんなさい。ちょっと疲れてるのね。」

彼女は階段の方に向かって来る。彼は突然身を覆いたい衝動にかられる。彼の体が彼を恥入らせる。ちょうど彼女がシャツ1枚着ていない彼を見て「ニール！あなた、脇の下に毛が生えているじゃない！」とうれしそうに言った日以来、彼女の面前で恥入ってきたように。

注.....

ℓ. 2 ◇ upon returning home

基本的には on …ing = as soon as S + V, in …ing = when S + V。

ℓ. 10 ◇ check 「小切手」

※他には「勘定書；伝票」, 「照合；検査」などの意味がある。

ℓ. 14 ◇ arguing with = quarreling with

cf. dispute ①「議論する；討論する」 ②「反論する；反駁する (= argue against)」

ℓ. 15 ◇ on the verge of ~ = on the brink of ~

verge も brink もともに「縁→瀬戸際」の意。

「～」の位置に動詞的要素を持って来るなら、前置詞 (of) の後であるから、動名詞にする。

ℓ. 20 ◇ egoism (⇔ altruism (利他主義)) cf. egotism ; egocentrism (= egocentricity)

この場合、その中身は次のようなもの。

「息子の自分が（2年も）いなかったのに、お母さんの生活には何の影響もないなんて、そんなことがあるだろうか？」

Neil は、この問いを母親に尋ねようとして“Mom —”と言いかけるのだが、母親に気押されて、結局聞けずじまいになってしまう。

ℓ. 26にある his original question とは、このこと。

ℓ. 23 ◇ when you get back

この you は複数。すなわち「(Wayne を迎えに空港に行った) Neil と Wayne (およびその他) が戻って来たら」の意。

ℓ. 25 ◇ more of an answer than a question

more (of) A than Bが「Bというより（むしろ）A」の意であることは基礎知識の部類。このAやBが名詞の場合に限り、「属性を表す of」が入ることもある。

ℓ. 32 ◇ inscrutable

他動詞 + -able ; -ble は、「可能」+「受身」の意味を持つ。したがって、

her eyes are inscrutable (in は否定の接頭辞)

= her eyes are not able to be scrutinized

となる。

ℓ. 33 ◇ I'm anxious to meet Wayne.

○ be anxious to … 「…したくてたまらない」

cf. be anxious about ~ (～を心配している)

be anxious for ~ (～を熱望している)

ℓ. 36 ◇ in her presence

○ in one's presence 「～の居るところで；～の面前で」

【3】

A.

解答

(a) (1) A few minutes' walk brought me to the lake.

(2) What has brought you here?

(3) There was a knock on [at] the door.

(b) (1) There was a big fire near my house last night.

- (2) This bus will take [takes] you to the station in ten minutes.
 (3) It has just struck [gone] eight.

解説

- (a) (1) walk は名詞で「歩行時間」の意。「数分間の歩行(時間)が私を湖まで連れて行った」と考える。なお、a few の後にハイフンがあれば、a few-minute walk となるが、ここではハイフンが与えられていないので、a few minutes' walk としなければならない。
- (2) 「何があなたをここに連れてきたのですか」と考える。
- (3) knock は「ノックする音」の意味。続く前置詞は通常は on だが、「中に入れてくれ」と言って叩く意味合いを強めれば、「目標」を表す at を用いることも可能。なお、この There was a knock on [at] the door. は「誰かお客さんが来たみたいだよ。」という日本語にも対応する。
- (b) (1) There is …構文の適用範囲は広く、一般の出来事に用いると simple な英文になる。本問もその例。「昨夜、家の近くで大火事があった」と考える。「大火事」は a big fire。もし、a big fire を主語にすれば、A big fire broke out near my house last night. となる。
- (2) 「このバスは10分間であなたを駅まで連れて行く」と考える。「駅」は、話者と相手との間の「了解事項」であることを示す the を付ける。take は go, bring は come に対応するので、目的地(=駅)を中心に考えていけば、take の代わりに bring を使うこともできる。ただし、lead は不可。lead は文字通り「リードする；案内する」ということなので、lead を用いる場合は、主語に「道」や「目印になるもの」、またはそれに準ずるものがくる。
cf. This street leads to the factory. (この通りは工場に通じている。)
- (3) 例えば、the clock を主語にして、「時計がちょうど8時を打ったところだ」という内容を表すには、The clock has just struck eight. となる。本問では、the clock の代わりに、「時」を表す主語の it が入ったと考えればよい。it を用いれば、「時間が過ぎる」という感覚から、struck の代わりに gone を用いてもよい。

B.

ポイント

エッセイ風の長い日本語を英訳する際には、日本語の内容を変えない範囲で、英語にしやすいように日本語を読み換え、自分の知っている表現に当てはめていくことが必要となる。日本語を逐語訳していただくだけでは、自然な英文にならないことが多い。

解答

From the top of the hill, you can see the whole bay. When I was a child, I used to stand there and watch the ships go in and out of the port, wishing I could go to a faraway land on one of them.

別解

When you stand on the hill, you can enjoy a panoramic view of the bay. As a child, I would often watch the ships enter and leave the port, and wished I could be on one of those ships going to some distant country.

解説

第1文は you や one を主語にして「あの丘の上から湾を一望することができる」とする構文が簡潔だが、「あの丘」を主語にして動詞 command ～（～を見渡す；～を見下ろす）を用い、「湾の全景」を目的語とする構文も考えられる。

第2文はかなり長い。まず「私が子供だった頃」の副詞節を文頭に置く。日本語は「～を眺めながら、…と思ったものだった」となっているが、英文では「…と思いながら、～を眺めたものだった」という構成が最も自然な表現である。分詞構文を用いる場合、「私はそこから港に出入りする船を眺めたものだった」の文を主節として、その後に「そんな船の1つに乗ってどこか遠い国へ行ってみたいと思ったものだった」を「…と思いながら」と読み換えて付帯状況を表す分詞構文で続ける。「～を眺め、そして…と思ったものだった」のように2つの節を接続詞でつないでもいい。

- 「あの丘の上に立つと」you や one を主語とする構文の場合は from (the top of) the hill と句で表すと簡潔。when [if] you stand on the hill と節で表してもよい。
- 「湾が一望できる」you [one] can see the whole [entire] bay (湾全体を見ることができるとすると簡単だが、you [one] can enjoy a panoramic [whole] view of the bay とする表し方もある。また、前述のように「丘」を主語として、the hill commands a whole view of the bay とするものもよいだろう。この場合、目的語は the whole bay でもよい。
- 「私は子供の頃」when I was a child でよい。as a child とすることもできる。
- 「よくそこから港に出入りする船を眺めながら」は「そこから港に出入りする船を眺めたものだった」と読み換える。「よく…したものだ」という過去の習慣的動作は would …や used to …で表せる。「港に出入りする船を眺める」は「船が港に出入りするのを眺める」と考えて、watch the ships go in and out of [enter and leave] the port とする。
- 「そんな船の1つに乗って」on one of those ships と句で表すか、take one of those ships とする。
- 「どこか遠い国へ」to a [some] far [distant] country ; to a faraway land など。
- 「～へ行ってみたいと思う」I wish I could go to ~ ; I dream of going to ~ とする。

【4】

解答

- (1) to be standing → to stand
- (2) was resembling to → resembled
- (3) explain me → explain to me
- (4) apologized the interviewer → apologized to the interviewer
- (5) 文末に on を加える
- (6) spoken by → spoken to by

- (7) familiarize with → familiarize yourself with ; be familiarized with ; be familiar with
- (8) hope → want [wish] または, I hope (that) you will go.
- (9) want → hope または, We want you to come a little earlier. または, We wish you would come a little earlier. (実現の可能性の低い仮定)

解説

- (1) 「大聖堂は川縁に立っているようだ。」
進行形は, 今進行している行為がいずれ終わることを意味するので建物などが「位置する」という意味では進行形にしない。
cf. He was standing there. (彼はそこに立っていた。) → ○
- (2) 「私は父に似ているとよく言われた。」
resemble は状態を表す動詞なので進行形にしない。
- (3) 「どうやってその問題を解いたか私に説明していただけませんか。」
○ explain A to B 「AをBに説明する」
“explain B A ” の語順になることもあるが非標準的用法。
- (4) 「彼女は約束に遅れたことを面接官に詫びた。」
○ apologize to A for B 「AにBのことで謝罪する」
apologize は自動詞。
- (5) 「彼は当てにできない。」
We are not to rely *on* him. の態を変えたもの。
○ rely on ~ 「～に頼る」
○ be 動詞 + to … 「可能」
- (6) 「昨日, 劇場で米国人に話しかけられた。」
問題文は An American spoke *to* me … の態を変えたもの。
- (7) 「君はできるだけ早くコンピューターに慣れた方がよいだろう。」
○ familiarize A with B 「AをBに慣れさせる」
○ might [may] as well … 「…した方がよい」 ※ might は may の婉曲。
- (8) 「あなたに行ってほしい。」
hope to … (…したい) という文型はとるが, hope A to … という文型はとらない。
- (9) 「少し早く来てほしい。」 (「少し早く来てくれたらなあ。」)

	want	hope	wish
S V to …	○	○	○
S V O to …	○	×	○
S V that …	×	○	○※

※ただし, that は通例省略し, 節内の動詞は仮定法。

【5】**解答・解説**

- (1) do
「たばこなしで済ますのは難しいということがわかった。」
○ do without ~ 「~なしで済ます」
- (2) get
「誰も彼の決心を変えさせることはできない。」
○ get A to ... 「Aに ...させる」
- (3) came
「私が意識を取り戻した時、月は沈み、輝かしい朝が始まりかけていた。」
○ come to oneself 「意識を取り戻す」 (= come to)
cf. come to one's senses (まじめになる)
- (4) went [became]
「彼はついに目が見えなくなった。」
○ go [become] C 「Cになる」
go の場合は通例「悪い状態になる」という意味で用いられる。
- (5) came [got] [have come [got] / will come [get] など可]
「私は船上で彼と知り合いになった [なるだろう]。」
○ come [get] to ... 「...するようになる」
- (6) took [has taken / will take も可]
「敵は夜の闇を利用した [利用するだろう]。」
○ take advantage of ~ 「~を利用する」
- (7) lying
「彼は彼女がいつものようにソファに座っているのではなくて、窓のところに立っているのを見つけた。」
○ find A ...ing 「Aが...しているのを見つける」
standing に合わせて現在分詞にする。
○ lie on ~ 「~に横たわる」
- (8) done
「これらの処置によってもたらされる益は害よりも大きい。」
The good を修飾する過去分詞にする [= The good that is done]。
the good 「益」
“the + 形容詞” で抽象的意味を表す用法。
- (9) having
「彼は召使いにいろいろなことをしてもらうのに慣れている。」
○ be used to ...ing 「...するのに慣れている」
○ have A ... 「Aに ...させる」
- (10) lay
「その花嫁の衣装の最大の魅力が、そのシンプルさにあるというのは明らかだった。」

○ lie in ~ 「～にある」 [= consist in ~]

主節の時制に合わせて過去形にする。

(11) kept [has kept も可]

「予期せぬ緊急事態のために、彼を訪問することができなくなった。」

○ keep [stop, prevent, hinder, prohibit, inhibit] A from …ing 「Aが…するのを妨げる」

(12) Let

「もう1枚写真を撮らせてください。」

○ let A … 「Aに…させる」